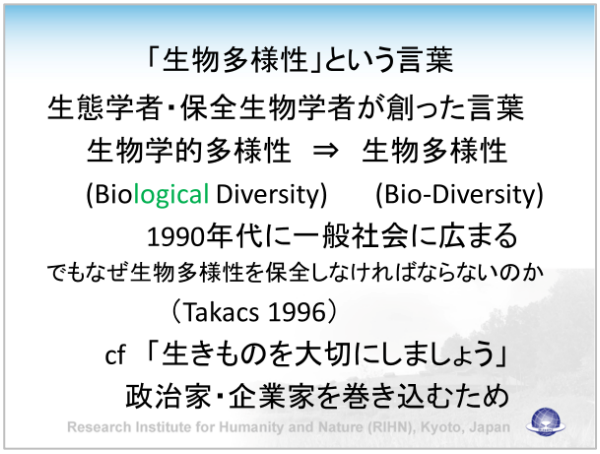
2022.12.9 りそなアジア・オセアニア財団第 10 回環境シンポジウム （於：ウェスティンホテル大阪）

趣 旨 説 明

総合地球環境学研究所
教授　阿部 健一

総合地球環境学研究所の阿部です。本日のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。



言葉にこだわってみようかなと思います。今日のキーワード、テーマである生物多様性という言葉、実は比較的新しく作られた言葉です。生態学者あるいは保全生物学者の方々が 1990 年代に作ったものです。後で登壇される山極さんも私も、広く言えば生物学のご出身です。

われわれが学生の頃には、この生物多様性という言葉はありませんでした。英語で言えば「Biological Diversity」、二つの言葉、生物学的多様性という言葉でわれわれは学んできました。それが 90 年代、二語だったものが一語になってハイフンで結ばれた。そして最近はハイフンを使わないことが多くなりました。「Biodiversity」英語圏では一つの言葉になり、同時に、この言葉が一般社会に広く広まっていくことになります。

なぜ、生態学者あるいは保全生物学者が、この Biodiversity という言葉を作ったのか。これは一般の人たちにこの大切さを訴えかけるために、Biological Diversity という学術的な用語を一つにしたということなのです。ほんのわずかな違いですが、その効果は大きかったようです。この言葉自体が一般に広く知られるようになりました。そして日本語では生物多様性という言葉で訳されるようになったということなのです。

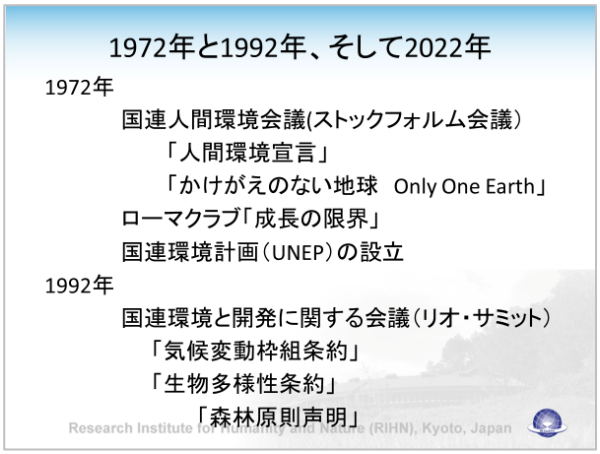
面白いのは、その生態学者あるいは保全生物学者があらためて「なぜ生物多様性を保全するのですか」と聞かれると、「うーん」と答えに窮します。実は生態学者や保全生物学者にとってこれはあまりにも当たり前のことで、それを論理的に説明することは極めて難しいことなのです。ただこの言葉を作ることによって、とりわけ大きかったのが政治家あるいは企業の方々へ、とても大切なものであるということを伝えることができたわけです。あくまでもそういった一般社会に通用する言葉、そのように理解していただければと思います。

その上で、あらためて生物多様性というのは、いったいなぜ重要なのか、なぜ大切にしなければいけないのかということですが、多くの方が「生きものがたくさんいることが大事なのでしょう？」と答えるかもしれません。それは半分正しくて、実はまだ生物多様性という概念の大事な点を、十分に理解されていないということが言えると思います。

生きものがたくさんいる、それはすごく大事なことなのですが、もっと大事なのは、そのたくさんいる生きものがつながっているということです。どの一つの生きものも、単独では生きられないのです。いろいろな関係性、食うものと食われるもの、あるいはは共生というものがあります。例えば 1 本の木でどれだけの生きものがそこで生活しているか。その 1 本の木がなくなってしまうと、多くの生物が自分の食料や住処を失う。つながっているということが実は大事なのです。

たくさんの生きものが全部つながっている。そしてそのつながりの中にわれわれ人類、ホモサピエンスもいるということです。だから生物多様性というのはとても大切なのです。

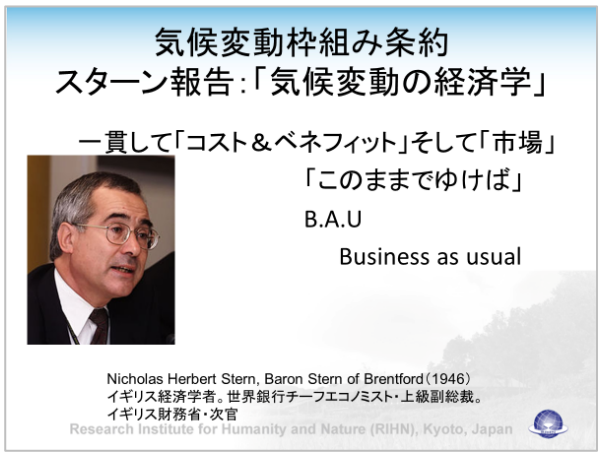
ここにオランウータンの写真をお見せしています。片方のほう、これは私の名前がついているトビムシです。トビムシは小さな、小さな虫なのですが、私が和歌山の照葉樹林中で採集し、分類学の吉井良三先生が名前をつけてくださいました。和名でアベチビマルトビムシといいます。でもこういった多様な生きものが、全部つながっている。つながりは網の目のようです。繰り返します。その網の目の中にわれわれ人類もいる。だから、生物多様性は本当に大切なものということです。



今年は2022年です。振り返ってみますと1972年、すでに50年が経ちましたが、この年に国連人間環境会議が行われ人間環境宣言が出されました。そこで本当に大切なことは言い尽くされています。「かけがえのない地球」という言い方もこの時にされました。

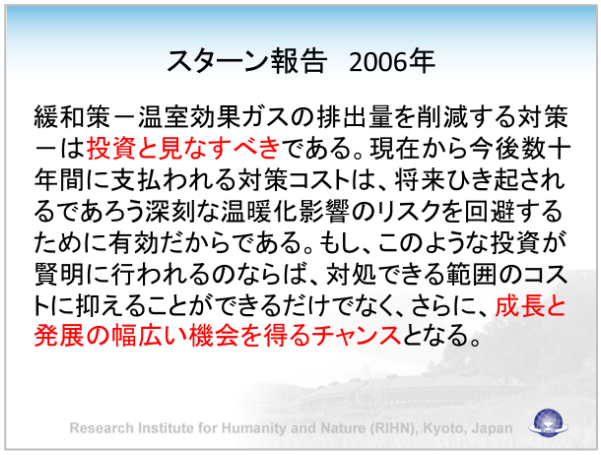
同じ年にローマクラブの「成長の限界」、このまま行くと地球は駄目になるということを、やはり50年前にはっきりとうたわれています。そして国連傘下で環境問題のことを扱う機関として、国連環境計画(UNEP：United Nations Environment Programme)がナイロビに本部を置いて設立されました。1972年というのはとても大切な年です。ちょうど50年前です。

そしてそれから20年たって1992年、リオサミット、地球サミットが開かれました。そこで気候変動枠組条約、そして生物多様性条約という二つの環境に関する国際条約ができました。この気候変動枠組条約、そして生物多様性条約について簡単に触れておこうと思います。



気候変動枠組条約、この条約の理論的な枠組みとなっているのが、スターン報告と言われる『気候変動の経済学』という報告書です。ニコラス・スターンさんというイギリスの経済学者で、世界銀行のチーフエコノミスト、イギリス財務省の次官を務められた方が取りまとめた報告書ですが、一貫してコスト&ベネフィット、そして市場原理ということをおっしゃっています。

この報告書で頻出するのが「B.A.U：Business as usual」という言葉です。「このままでいくと」地球は大変なことになる。当時の最新の科学的データで「このままいくと」どうなるのか明らかにした上で、どうするべきかということを問うた報告書です。

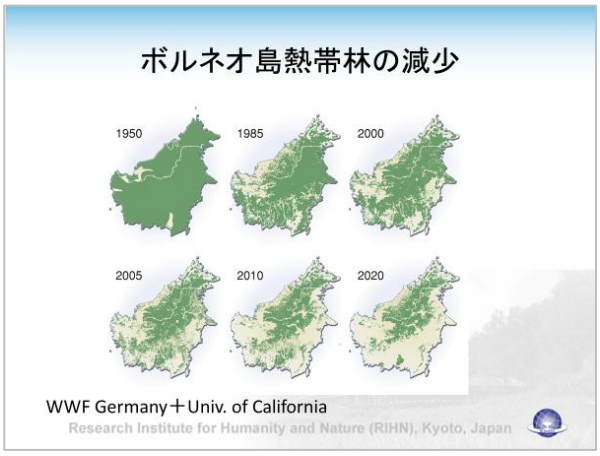


例えば温室効果ガスの排出量を削減する対策として、「緩和策は投資と見なすべき」だと書いてあります。「現在から今後数十年間に支払われる対策コストは、将来引き起こされるであろう深刻な温暖化影響のリスクを回避するために有効だから」であり、投資とみなしなさい。いますぐ行動を起こせば安いコストで将来失われるであろう膨大な利益を抑えることができる。だから、投資しなさいと。さらに「成長と発展の幅広い機会を得るチャンス」である。つまり、ビジネスチャンスだと言っています。2006年のことです。これが気候変動枠組条約で、スターンさ

んが取りまとめたことです。

生物多様性のほうでは、生物多様性条約。これは 2010 年に『生態系と生物多様性の経済学』という TEEB と略していますが、報告書が出されました。この報告書をまとめたのが、パヴァン・スクデフさんでドイツの方です。ドイツ銀行のグローバル・マーケティング部門のディレクターです。

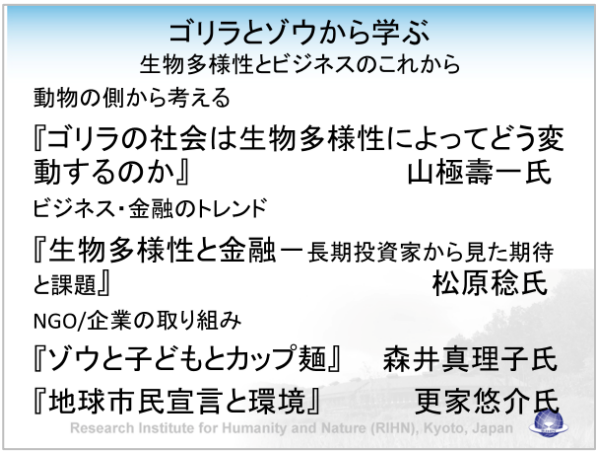
彼は一貫して、「自然を大切にするために自然に値札をつけよ」と言っています。もちろん、それだけでは駄目です。しかし一つの大きなやり方として、自然、それに値段をつけなさいと提言しています。やはりここでも市場原理ということを強くうたっています。彼が最後にいみじくも言った言葉を載せています。「生物多様性のために、私の長年の銀行家としての経験をこの報告書に最大限生かしました」。銀行、企業、こういった方を巻き込んで、生物多様性の保全あるいは気候変動対策をしなければということなのです。



あとで森井さんが話をされるボルネオについて、森林がどうなっているかを少し見ておきたいと思います。1950 年から 2020 年までです。緑が森林だった場所ですが、もう一目瞭然で、どんどん森林が減少しています。

この写真は何かというと、油やし、オイルパームのプランテーションです。熱帯林を伐採した後に、一面にわたって植えられています。その中に農園で働く人たちの家、政府や企業が建てたものですが、人口の多い地域の貧しい人たちが移住してきて働いています。こうしたプランテーションがボルネオ中に広がっています。マレー半島も、スマトラ島でもこういった状況になっています。

残念なことに生物多様性条約、さらには気候変動枠組み条約、これがまだまだ十分生かされていません。1972 年既に人間環境宣言が出され、いろいろな環境問題へ国際的な関心が集まりました。そして 1992 年に地球サミットが行われました。そして 2022 年、まだまだやらなければいけないことがあるということです。



そこでこのシンポジウムを企画いたしました。あらためて今日の講演者、簡単にご紹介いたします。まず、動物の側から考えてみましょうということで、われわれ地球研の所長である山極さんに、「ゴリラの社会は」ということでたっぷりゴリラの話をしてもらおうということになっています。

続いて、今度はビジネス界です。金融のほうから松原さん、り

そなアセットマネジメントの執行役員です。生物多様性をめぐり、企業あるいは金融がどうなっているのかということは大切で、しかも画期的なことです。じっくりお話を聞きたいと思います。

そして、実際に具体的な活動をされている2人の方にお話しをいただくということになっています。われわれ財団の環境事業で助成させていただいている、ボルネオ保全トラスト・ジャパン理事の森井さん。ゾウの話、子どもの話、そしてカップ麺の話ということです。一見無関係なことのようですが、つながっているのです。最後にサラヤ株式会社の社長であり、ゼリ・ジャパンの理事長である更家さんからは、もう少し大きな話になろうかと思います。お考えや活動内容についてお話いただくことになっています。

皆さんの話を聞いた後に、パネルディスカッションでさらにいろいろな考え方を深めていくことができればと思っております。

趣旨説明をこれで終わります。どうもありがとうございました。

（終了）